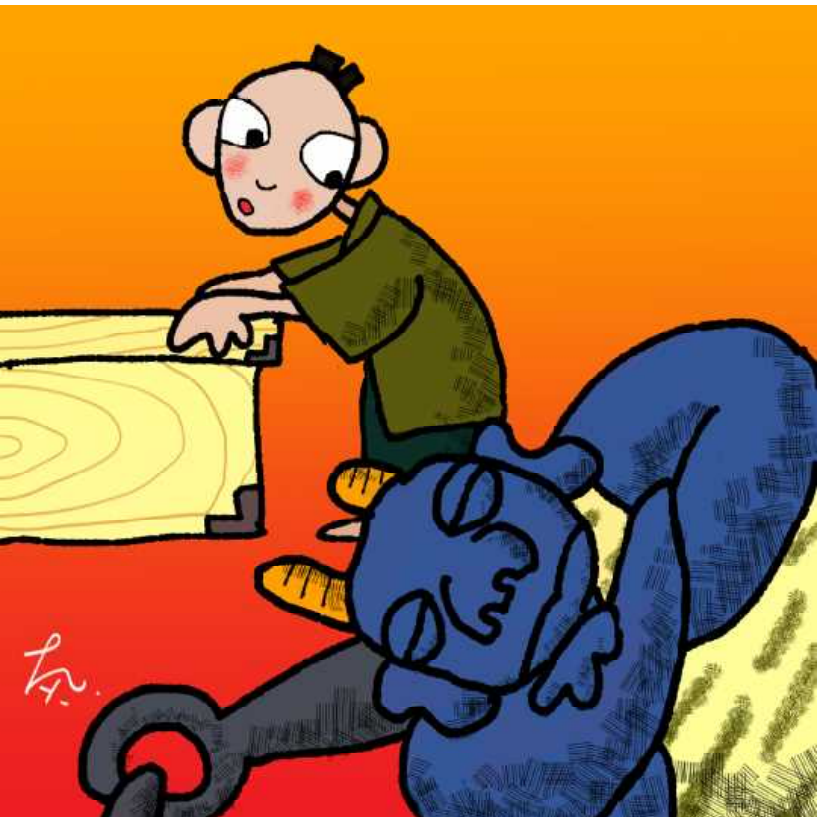


鬼の豆・隠岐郡知夫村多沢

令和3年11月16日

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男



語り手 小泉ハナさん（明治26年生まれ）  
収録・昭和50年6月4日

あらすじ

昔があつたげな、鬼と人間とが出会つて、「鬼の世の中になるか、それとも人間の世の中になるか」と論をしたげな。そのあげく、「炒り豆に花が咲いたら鬼の世の中になるが、もし咲かなかつたら人間の世の中になる。そして、豆を炒つて入れちの箱に入れて十二時過ぎに花が咲いておれば、鬼の勝ち」。

こういうことにして掛けをしたげな。鬼は安心して寝てしまつたげな。

十二時過ぎ。人間がそつと見たところが、箱の中の炒つた豆に花が咲いていたげな。

「これはろくなことはない」あわてて人間は豆をすりかえ、鬼の豆を箱にしまつて蓋をしておいたげな。そして、

寝ている鬼に向かつて、「さあさ、鬼、起きい」とたたき起こしたげな。

そうして箱の中を見たところ、人間が豆をすりかえておいたので、花は咲いておらぬ。結局、鬼が負けたことになつたので、魔が起きないようになつたげな。節分の晩、「鬼は外。福は内」と掛け合いをするのは、それから始まつたことだけな。

解説

ここに登場する鬼は間が抜けていて、人間を信用して寝入っている隙に、人間が鬼の予言した花の咲いた炒り豆を、そうでない普通の豆とすり替えてしまうのである。つまり、ここではむしろ人間の方がアンフェアな方法で、鬼を出し抜く。鬼はいかにも善人で、すっかり人間を信用し、豆がすり替えられたことなど全く知らないし、人間を疑おうともしない。どうひいき目に見ても、人間より鬼の方が好感が持てる。ただ、この話では鬼の世になれば、魔が起きることになるので、それを防ぐために人間が不正な方法を講じてでも豆をすり替えなければなかつたと、

あくまでも人間サイド弁明するだけでなのである。

ところで、そもそも鬼とはいかなる存在なのだろう。

頭には二本の角が生えており、口にも牙がある恐ろしい妖怪であると、認識されているが、果たしてそうなのだろうか。秋田県の男鹿半島にはナマゲなる民俗行事があり、小正月に鬼面をかぶつた青年団長と副団長が、藁箆を着て、木の包丁を持ち訪問神となり、家々を訪れ、仕事を怠けて囲炉裏の火にあたりたり、コタツに入つて暖をとつて怠けている者を、連れに来るとさされている。そのとき発する「ナマミコはげたか、はげたかよう」のナマミコとは、火にあたつていると出来る火だこのことである。それを取りに来るといふのであるから、怠け者を戒める意味を持つ。

鬼はするように本来、怠け者を戒め、真面目に働いている者には「褒美として、豊作や豊漁を授ける訪問神だつたのである。

（元島根大学法文学部教授）